

前域に生起する非テーマ成分について

人見 明宏

0. 問題設定

文のテーマは、前域に生起する傾向がある。これは、テーマが発話においてそれについて語られているものであり、従って発話の出発点であり、通常旧情報や既知の成分と一致するため、話者が旧情報・既知の成分から新情報・未知の成分へと文肢を配列するという情報伝達の点からもたやすく理解できることである。しかし、前域に生起した成分がすべてテーマであるというわけではない。換言するならば、前域はテーマが生起する唯一の位置とは限らない。前域に非テーマ成分が、それどころかある特定の状況においては、前域にテーマが生起することすらある。本稿では、前域に生起する非テーマ成分について、特に前域にテーマが生起する可能性について考察するものである。

1. テーマの概念について

テーマ・レマという概念の萌芽は、すでに 18 世紀中頃に、Henri Weil の point of departure と goal of discourse という用語に見られる。この Weil の見解は、19 世紀後半に Gabelentz によって取り上げられ、psychologisches Subjekt と psychologisches Prädikat という術語が用いられ、これはさらに H. Paul によって受け継がれていく。

その後 20 世紀になると Ammann によって、これらの概念から心理的要素を取り除いた、テーマ・レマという術語が導入される。彼はテーマを「伝達の対象」、レマを「話し手が聞き手にテーマについて

述べるべき新しいもの」と、この両概念を伝達の観点から定義する¹⁾。

テーマ・レーマの問題を特に精力的に研究してきたのは、チェコのプラーク学派である。とりわけ 1930 年代以降の Mathesius による体系的な研究は、この分野における研究の基礎を築くものであった。

テーマという概念に関しては、これまでも多くの研究者によって定義されてきた。その中で最も妥当であると思われるのは、プラーク学派の Daneš の *das, worüber etwas mitgeteilt wird* であり、レーマに対しては *das, was darüber mitgeteilt wird* という定義であろう²⁾。また Beneš も同様にテーマを *das, worüber etwas ausgesagt wird* と、レーマを *das, was darüber gesagt wird* と定義している³⁾。この両者の定義に見られるのは、テーマは「伝達の対象」であり、レーマは「伝達の内容」という点であり、本稿でもテーマ・レーマという概念をこの意味で用いている。

なお、テーマ・レーマと極めて密接に関連するのが、新・旧情報や既知・未知といったテーマの内容面に関わる概念や、Halliday に見られるような文頭要素などの語順の問題である⁴⁾。ただし、本稿の目的はテーマという概念の定義や、テーマに付随する内容上の特徴を明らかにする点にはないので、この問題にはこれ以上立ち入ることはせず、次章ではテーマの発現形態の問題を取り上げることにする。

2. テーマの発現形態について

話し手がある発話を行うとき、文肢をいかなる順序で配列するかには、二つの要因がある。その一つは文法的語順であるが、これは本稿で考察する問題ではない。もう一つの要因は、伝達価の問題である。すなわち、話し手は通常旧情報や既知の成分であるテーマから始め、このテーマに関して、伝達価の高い新情報や未知の成分を続けることで陳述をなすのである。これはまた、伝達価の高い成分をできる限り文末に置くことで、聞き手がその陳述内容を理解する際に生じる負担を軽減することにも役立っている。つまり、文のテーマを選択する自由は話し手にあるということである。しかし、その一方で聞き手にはそのような選択の自由はないのであろうか、という疑問も生じる。例えば、通常のテーマ・レーマ分節で話し手が以下の発話をなしたとする：

1) Kolumbus entdeckte 1492 Amerika.

コロンブスは 1492 年にアメリカを発見した。

話し手は、Kolumbus をこの文のテーマとして選択しているわけだが、話し手の意図に反して、聞き手がこの発話を以下のように解釈する可能性はないのであろうか：

1') Amerika entdeckte 1492 Kolumbus.

アメリカは 1492 年にコロンブスが発見した。

これは、例えば聞き手にとって「アメリカ（が 1492 年に発見されたこと）」がなんらかの事情で既知であるか、あるいはその意識にのぼっている場合であり、聞き手の関心が「（アメリカを 1492 年に発見したのは）誰なのか」という点にあるためである。このとき聞き手は、話し手がテーマとした Amerika をこの文のテーマとして選択したことになる。しかし、文 1) を 1') と読むには、次の 1'') のように、前域にある Kolumbus に文アクセントが置かれる必要がある（以下、文アクセントを有する成分を明示する際には、ボールド体を用いる）。

1'') **Kolumbus** entdeckte 1492 Amrika.

コロンブスが 1492 年にアメリカを発見した。

文 1'') のように、前域に生じた成分がテーマと見なされるには、それに文アクセントが置かれなくてはならず、話し手が 1) のように通常のテーマ・レマ分節で発話をなす限り、前域成分には文アクセントは置かれず、従って、聞き手がこの発話のテーマを取り違えることは通常あり得ないであろう。

確かにテーマは旧情報や既知の成分といった、伝達価や意味内容の領域に属する概念であるが、その一方でテーマには、上で見たような、前域に生起し、かつ文アクセントが置かれないという形式上の指標がある。以下では、このようなテーマの発現形態について考察を進めていく。

2.1. 語順

Boost (1955) は、発話の際に話し手は既出の成分を前域に配置し、この成分から始めて文を構成するとしており、Halliday (1985) も前域の成分をテーマとしている。以下のテキストにおいても、前域に生起した成分の大部分が、その文のテーマとして認められる（各文のテーマには下線を施してある）。

2) Deutschland liegt in der Mitte Europas, zwischen den skandinavischen Ländern im Norden, den Alpenländern im Süden, den Ländern im atlantischen Westeuropa und im kontinentalen Osteuropa. Es reicht „vom Fels zum Meer“, d.h. vom Hochgebirge der Alpen bis zur Nord- und Ostsee. Nach Westen, Osten und Norden gibt es keine natürliche Abgrenzung, wodurch Deutschland seit alters ein Raum des Durchgangs und des Austauschs von Völkern, Kulturen, wirtschaftlichen, sozialen und geistigen Kräften und Ideen, aber auch der politischen Auseinandersetzung ist.

Deutschland ist seit dem Ende des Zweiten Weltkrieges geteilt. Eine 1 378 km lange Grenzlinie trennt die beiden Staaten in Deutschland: die Bundesrepublik Deutschland im Westen und die Deutsche Demokratische Republik (DDR) im Osten. Auf östlicher Seite ist sie durch Sperranlagen hermetisch abgeriegelt und streng bewacht (siehe S. 72/73).

Das Staatsgebiet der Bundesrepublik Deutschland ist 148 708 km² groß. Die längste Ausdehnung von Norden nach Süden beträgt 867 km, von Westen nach Osten 453 km. An seiner schmalsten Stelle mißt das Bundesgebiet zwischen Frankreich und der DDR nur 225 km. [...]

(Tatsachen über Deutschland)

このテキストには、10 のテーマが含まれているが、そのうち前域に生起していないテーマは3つのみである。5番目のテーマである die beiden Staaten in Deutschland は、同格の die Bundesrepublik Deutschland im Westen und die Deutsche Demokratische Republik (DDR) im Osten がこれに

後続するため、これらすべてを前域に生起させると、前域成分があまりに長くなり過ぎるという文体上の理由から、前域には配置されなかったものと思われる。また6番目のテーマ *sie* と最後のテーマ *das Bundesgebiet* の場合は、これらの生起している文の前域には副詞的規定 (*Auf östlicher Seite* および *An seiner schmalsten Stelle*) が現れているが、この副詞的規定は共にテーマの一部と見なされる(3.4.を参照)。従って、このテキストでテーマ(の一部)が前域に生起しているのは一例にしか過ぎない(*Eine 1 378 km lange Grenzlinie ...*)。

2.2. 文アクセント

文アクセントが置かれるのは、通常は文末に配置されるテーマ(の一部)であり、前域に生起したテーマには文アクセントは置かれない。つまり、前域に生起するという点と、文アクセントが置かれないという点は、テーマに共通する特徴であり、ある意味では余剰のテーマ指標でもある。この原則に反して、仮に前域成分が文アクセントを有しているとすれば、それは対照アクセントであり、この成分はテーマである。Eroms (1986) は以下の例を挙げている：

- 3) **Heinrich** schreibt ein Theaterstück.
- 4) **Heinrich** und nicht Heiner schreibt ein Theaterstück.
- 5) Auch **Fritz** hat Mathematik studiert.

さらに Eroms はこのような対照アクセントが置かれた文に関して以下のように続けている：

In allen diesen Fällen muß die durch Kontrastakzent hervorgehobene Konstituente als das einzige rhematische Element im Satz aufgefaßt werden, der gesamte Satzrest ist thematisch.⁵⁾

2.3. 主語

テーマと主語も多くの場合一致している。Engel (1972) および

Eisenberg (1989) によると、平叙文の主語のおよそ 60% がテーマである。先のテキスト 2) においても 10 のテーマのうち 7 つが主語である。さらにそのうちの 6 つが前域に生起している。前域に生起すること、文アクセントを持たないこと、および主語であることが形式上のテーマ指標であることは疑いない。

2.4. 受動態

前域に生起する、文アクセントを持たない主語がテーマの形式上の特徴であるため、テーマを明示するために受動態もしばしば用いられる。例えば次の能動文、

6) Ein Schüler löste die Aufgabe ganz leicht.

では、テーマ（の一部）である ein Schüler が前域に現れている。この文のテーマ die Aufgabe を前域に配置する手段の一つが、受動文である：

6') Die Aufgabe wurde von einem Schüler ganz leicht gelöst.

その際、これらに先行する文脈として、次のような文を設定してみる：

7) Der Lehrer stellte eine schwierige Aufgabe.

この場合、文 7) に後続する文としては、文アクセントを持たない主語をテーマとしている受動文の 6') の方がより自然である。

また、ドイツ語の場合能動文の 3 格目的語を受動文の主語にすることができないため、次の文 8) の受動文は 8') になる。

8) Ihr Freund schenkte ihr Blumen.

8') Ihr wurden von ihrem Freund Blumen geschenkt.

8') のテーマ ihr は、前域で文アクセントを持っていないが、1 格の主語ではない。これにさらに主語という形式上のテーマ指標を加えるためのものが、いわゆる bekommen 受動である。

8'') Sie bekam von ihrem Freund Blumen geschenkt.

2.5. 定性

テーマは通常定冠詞を伴った名詞や代名詞の形で生起するが、これは、テーマが旧情報や既出の成分と一致するためである。以下の例では、

- 9) Es war einmal eine kleine süße Dirne, die hatte jedermann lieb, der sie nur ansah, am allerliebsten aber ihre Großmutter, die wußte gar nicht, was sie alles dem Kinde geben sollte. Einmal schenkte sie ihm ein Käppchen von rotem Sammet, und weil ihm das so wohl stand und es nichts anders mehr tragen wollte, hieß es nur das Rotkäppchen. [...]
 (Rotkäppchen. In: Brüder Grimm. Ausgewählte Kinder- und Hausmärchen.)

最初にレーマとして導入された eine kleine süße Dirne が、後続する文で指示代名詞で受けられ、この文のテーマとなっている。そして今度は、この文でレーマとして導入された ihre Großmutter を受ける指示代名詞および人称代名詞が後続する二つ文のテーマとして現われている。最後の文のテーマ es は、既出の Kind を受ける人称代名詞である。

3. 前域に生起する非テーマ成分

前章で見てきたように、5つの指標が有力な形式上のテーマ指標として認められる。前域に生起した成分が、文アクセントを持たず、(能動態、受動態を問わず)その文の主語で、かつ定性を有していれば、まずそれがその文のテーマであると断言できよう。そして、その中でも特に重要な役割を演じているのが、前域である。これは、テーマが陳述の出発点であり、話し手は通常、このテーマに関してさらにレーマを続けることで陳述をなすためである。従って、前域に生起した成分の多くにテーマ性が認められるのである。しかしもちろん、前域に生起した成分のすべてがテーマであるわけではない。本章では、非テーマ成分が前域に生起するいくつかのケースについて考察していく。

3.1. 対照

ある言語要素が他の言語要素との比較において用いられている場合、この言語要素には対照が置かれている。そして対照は対照アクセントや語順などによって明示される。

テーマが通常前域で生起し、文アクセントが置かれたいのに対して、新情報や未知の成分は常に強いアクセントが置かれる。一方、伝達価値の高いレーマは文域（の後方）に文アクセントを置かれて生起するのが原則である。もし、この原則から逸脱して、強いアクセント（対照アクセント）が置かれた成分が前域に生起している場合、この前域成分はレーマと見なされるのである。例えば、次の会話において、

10) A: Max schwimmt am schnellsten.

B: Nein. **Klaus** schwimmt am schnellsten.

B は A に「(マックスではなく) クラウスが一番速く泳ぐ」、換言すれば「一番速く泳ぐのは(マックスではなく) クラウスである」ということを伝達している。ここではすでに X schwimmt am schnellsten が既出であるためテーマとなっており、前域に生起した Klaus がテーマではなく、レーマであることを明示するために、これに有標のアクセントである対照アクセントが置かれているのである。このような対照は、しばしば先行する陳述内容の一部訂正という形で現われ、訂正されない部分がテーマとなり、訂正された部分がレーマとなる。以下の例も同様である：

11) A: Otto hat Mathematik studiert.

B: Auch **Fritz** hat Mathematik studiert.

3.2. 応答文

補足疑問文に対する応答文においても、しばしばレーマが前域に生起する。Haftka は、このような応答文に「特殊なコミュニケーション・語用論上のレーマ化機能」があるとしている⁶⁾。以下の例では、

12) A: Wer schwimmt am schnellsten?

B: **Klaus** schwimmt am schnellsten.

先行する補足疑問文の疑問代名詞 *wer* に対する答えの **Klaus** が、新情報であるため文アクセントが置かれ、これがこの文のレーマを形成している。また、応答文が完全な文の形を取らず、疑問詞に対する答えの部分だけの場合もある：

12') A: Wer schwimmt am schnellsten?

B: Klaus.

この B の答えは、文法的には不完全であるが、コミュニケーション上は全く問題がない。それは、このような省略文がレーマを含む限り、コミュニケーション上支障をきたすことはないからである⁷⁾。このようなケースは実際の日常会話においてしばしば認められるものである⁸⁾。

13) A: Wen hast du gestern getroffen?

B: Karin (habe ich gestern getroffen).

14) A: Wann geht ihr ins Kino?

B: Morgen abend (gehen wir ins Kino).

3.3. 現象文

現象文は、すべてが新情報であるため、必然的に前域にレーマ（の一部）が生起することになる。その際、特に主語と動詞のみで構成された二項の現象文では、主語に文アクセントが置かれる。

15) (Was geschah? -) Ein **Brief** kam.

16) Ein **Feuer** brach aus.

従って二項の現象文は、1 格の疑問代名詞を用いた疑問文に対する応答文と同じ構造になる。

17) (Was geschah? -) **Heinz** kam.

18) (Wer kam? -) **Heinz** kam.

しかし、17) の現象文では動詞 *kam* を省略できないのに対し、18) の

応答文の場合は，これを省略し，レーマである主語 Heinz だけでも適切な答えとなる。

17') (Was geschah? -) *Heinz.

18') (Wer kam? -) Heinz.

なお，現象文のように新情報のみで構成されている文の場合は，前域に空所充足の es が置かれることがあるが，これは伝達価の高いレーマ（の一部）を文域に移すためである。

15') Es kam ein Brief.

16') Es brach ein Feuer aus.

3.4. 副詞的規定

最後に，レーマではないが，前域にしばしば生起する副詞的規定を見てみる。

19) Ich habe gestern ein interessantes Buch gefunden.

19') Gestern habe ich ein interessantes Buch gefunden.

19) ではテーマである主語 ich が前域に生起しているのに対して，19') では時の副詞 gestern が前域を占め，ich は定動詞の直後に置かれている。heute, gestern, morgen などの時の副詞的規定は情報価が高くないため，（強いアクセントを置かれないかぎり）発話を導入する役割を果たす状況設定語として前域に生起する頻度が高い。Haftka (1981) はこの種の（時・場所の）状況設定語とテーマである主語に限って，そのどちらを前域に配置するかは話し手の選択に委ねられていると言う。

また，文脈に依存した時・場所の副詞的規定もしばしば前域に生起する。

20) Ich bin gestern in die Bibliothek gegangen. Dort / In der Bibliothek habe ich ein interessantes Buch gefunden.

この種の副詞的規定は先行する文で既出のものを受けており，これを前域に配置することで，接続詞を用いることなく発話の流れをスムーズ

ズにする働きがある。

さらに、テーマの一部が前域に生起するケースがある。次のテキストは、先の例 2) の一部である。

21) Das Staatsgebiet der Bundesrepublik Deutschland ist 148 708 km² groß. [...] An seiner schmalsten Stelle mißt das Bundesgebiet zwischen Frankreich und der DDR nur 225 km.

後続する文のテーマは、das Bundesgebiet であり、前域を占めている an seiner schmalsten Stelle には所有冠詞が付されており、このテーマの一部を成している。このような、あるテーマが持つ様々な面について言及する場合に、副詞的規定が（そのテーマの一部として）前域に生起することも多い。

4. まとめ

テーマの発現形態は、通常

- a) 前域に生起すること
- b) 文アクセントを持たないこと
- c) 主語であること（特に受動文の主語）
- d) 定性を有すること

とまとめることができる。本稿では特に a) の前域成分に焦点を絞って考察を進め、その結果この原則に反し、前域に生起してはいるものの、テーマではない成分について、以下の結果が得られた。

- A) 対照：対照アクセントを有するレーマ
- B) 応答文：疑問詞に対する答えの部分で、文アクセントを有するレーマ
- C) 現象文：構成要素がすべて新情報であるため、（特に二項文の場合）文アクセントを有するレーマ
- D) 副詞的規定：文アクセントはなく、既出もしくは情報価の低い時・場所の副詞句

そして、ここから見て取れるのは、前域成分とアクセントの相関関係

である。すなわち、前域に生起している成分がテーマもしくは既出・情報価の低い副詞的規定の場合は、前域成分には文アクセントは置かれず、無標のイントネーションであるが、前域成分がレーマ（の一部）である場合は、それに文アクセントが置かれるという、有標のイントネーションになるということである。

なお、本稿では前域に生起する非テーマ成分のうち、特に頻度の高いものに関して考察をしてきた。また前域に生起するという点で、多くの場合主語を問題にしてきた。従って、本稿では取り上げることのなかったケースもまだ残されているが、それらに関しては、別の機会に考察することとする。

注

- 1) Boost (1964), Lutz (1981).
- 2) Daneš (1970), S. 186.
- 3) Beneš (1973), S. 42.
- 4) Halliday (1985), S.39.
- 5) Eroms (1986), S. 63.
- 6) Haftka (1981), S. 751 f.
- 7) Engel (1988), S. 72.
- 8) ただし、応答文のレーマが常に前域に生起するわけではなく、レーマが通常生起する位置に現れることももちろん多い：
 - 13) B: Ich habe gestern Karin getroffen.
 - 14) B: Wir gehen morgen abend ins Kino.

1 次文献

- Tatsachen über Deutschland. Die Bundesrepublik Deutschland. Gütersloh: Bertelsmann. 1989.
- Brüder Grimm. Ausgewählte Kinder- und Hausmärchen. Stuttgart: Philipp Reclam jun. 1980.

2 次文献

- Beneš, E. (1973): Thema-Rhema-Gliederung und Textlinguistik. In: Sitta, H. / K. Brinker (Hrsg.)(1973): Studien zur Texttheorie und zur deutschen Grammatik. Düsseldorf: Schwann, S. 42-62.
- Boost, K. (1964): Neue Untersuchung zum Wesen und zur Struktur des deutschen Satzes. Der Satz als Spannungsfeld. 5.Aufl. Berlin: Akademie-Verlag.
- Daneš, F. (1970): Zur linguistischen Analyse der Textstruktur. In: Dressler, W. U. (Hrsg.)(1978): Textlinguistik. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S. 185-192.
- Engel, U. (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg: Groos / Tokyo: Sansyusya.
- Eroms, H.-W. (1986): Funktionale Satzperspektive. Tübingen: Niemeyer.
- Haftka, B. (1981): Reihenfolgebeziehungen im Satz. In: Heidolph, K. E. / W. Flämig / W. Motsch (Hrsg.)(1981): Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin: Akademie-Verlag, S. 702-764.
- Halliday, M. A. K. (1985): An Introduction to Functional Grammar. London: Edward Arnold.
- 人見 明宏 (1991): テキストにおけるテーマについて - 機能的テーマ構造 - (修士論文).
- Lötscher, A. (1983): Satzakzent und funktionale Satzperspektive im Deutschen. Tübingen: Niemeyer.
- Lutz, L. (1981): Zum Thema „Thema“. Einführung in die Thema-Rhema-Theorie. Hamburg: Hamburger Buchagentur.
- Weigand, E. (1979): Zum Zusammenhang von Thema / Rhema und Subjekt / Prädikat. In: Zeitschrift für germanistische Linguistik 7, S. 167-189.
- Weinrich, H. (1993): Textgrammatik der deutschen Sprache. Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich: Dudenverlag.
- Zifonun, G. / L. Hoffmann / B. Strecker (1997): Grammatik der deutschen Sprache. 3 Bde. Berlin / New York: Walter de Gruyter.